

奥三河地域の縄文時代後晩期の 様相について

—東栄町引田遺跡・本郷桜平遺跡を中心に—

● 川添和暁

東栄町引田遺跡および本郷桜平遺跡について、近年の調査成果をもとに分析結果を提示したものである。引田遺跡では、これまで広く知られていなかった縄文時代後期の様相を、本郷桜平遺跡については近年の発掘調査をもとに立地する地形などを復元した。周辺を含めた遺跡の分布を縄文時代後期（晩期前半も含む）と晩期後半以降とに分けて、その様相の差について指摘して、若干の私見を述べた。

1. はじめに

本稿は、北設楽郡東栄町引田遺跡および本郷桜平遺跡の様相について、近年の調査成果をもとに分析結果を提示したものである。両遺跡は、東三河奥部の縄文時代を代表する遺跡として学史的にも広く知られているものの、現状では断片的な情報に留まっている。特に、両遺跡については、たとえそれが些細な情報であったとしても、情報をつなぎ合わせることによって、遺跡の構造の解明を行なう必要が、継続的に必要であるといえる。

筆者は、この東栄町域の資料について、調査する機会を得ることができた。そこから得られた知見については、東栄町教育委員会に報告書を提出して、一旦はその責務を果たした。その成果の一部は、2005年に刊行された『東栄町誌 自然・民俗・通史編』に掲載されているが、今後は所蔵資料の内容物やそこから明らかになる成果を、できるだけ遺跡の理解につなげることが重要で、これがある意味では資料の活用といわれることにつながると、筆者は考えている。

本稿とともに『東栄町誌 自然・民俗・通史編』も併せて参照願えれば、幸いである。なお、以下の本稿では、これを『東栄町誌』とのみ表することとする。

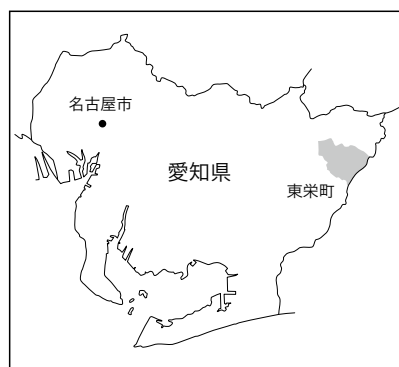


図1 東栄町の位置

2. 東栄町域の地理的環境

東栄町は、愛知県北東部の北設楽郡内に位置する（図1）。北は豊根村、西は設楽町、南は鳳来町、東は静岡県浜松市天竜区佐久間町に接する。町域は東西約15km・南北約10kmの範囲に及び、面積は123.4km²である。町内中央には、天竜川水系の大千瀬川が西から東の方向に流れており、周囲は標高1,016mを測る明神山をはじめ、900～1,000m代の山に囲まれた地形を呈している。その中では、西側から東側に向かって地形が傾斜しており、町東端の大千瀬川周辺が標高200m程度と最も標高が低い。

地質的な環境では、東栄町の南西側には花卉状を呈する設楽層群があり、東側には天竜川に沿って中央構造線が走っている。設楽層群では、棚山累層・神田累層・尾籠累層と、熔結凝灰岩の中でも剥片石器石材に適したガラス質の石材を産する層群が含まれている。中央構造線の東側（外帯）・西側（内帯）で岩帯を構成す

3. 東栄町域の考古学・埋蔵文化財調査の経緯

東栄町域における考古学・埋蔵文化財における調査について、表1にまとめた。大きく以下の四時期に分けることができる。

第1期：本郷桜平遺跡の紹介 本郷桜平遺跡は、明治期以降、地元の佐々木友八郎によって熱心に表面採集が行なわれた。遺跡が学界に紹介されたのは1925年のことであるが（夏目・窪田1925）、夏目らの報告によると、佐々木所蔵資料とともに、坪井正五郎や大林意備らの書簡が保管されていたという。このことから、本郷桜平遺跡の資料は、佐々木の熱意と人的交流もあってか、近代考古学の黎明期から学界には知られていたようである。小栗鉄鐵郎の報告では、本郷桜平遺跡の出土資料として、膨大な量の遺物写真が掲載されている（小栗ほか1932）。

第2期：町内遺跡の調査と『北設楽郡史』の刊行 本郷桜平遺跡以外も遺跡の所在が知られるようになった時期であり、岡田松三郎らによる業績が大きい。戦中・戦後の水田開発により、引田遺跡では土器棺墓などをはじめ大量の遺物が出土したという。西向遺跡やブヤキ窯跡の調査も行なわれた。また、本郷高校新校舎建設に伴って、本郷桜平遺跡では土器棺墓や竪穴建物跡の一部が見つかった。その後、校地整理にともなう調査により、竪穴建物跡と土器棺墓が見つかった。これらの成果は、『北設楽郡史』にすべて掲載された（鈴木・岡田1968）。

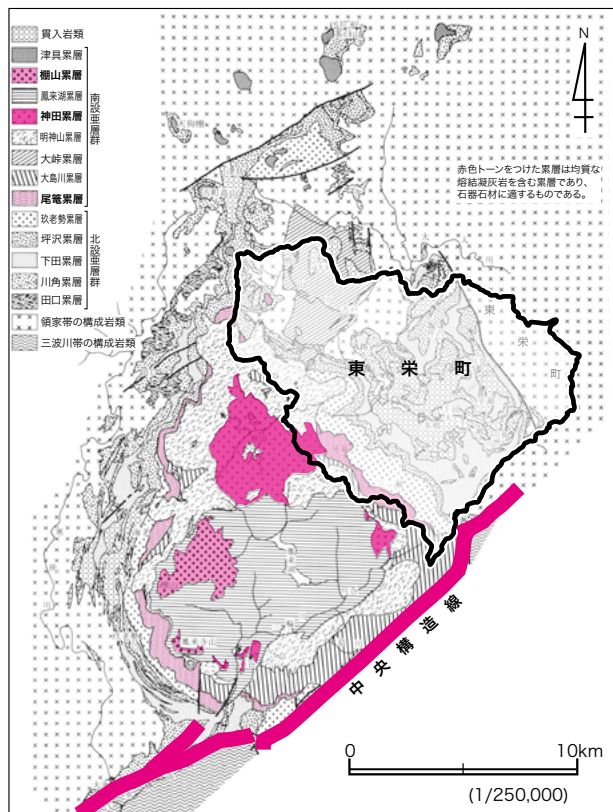


図2 東栄町周辺の地質図（沢井ほか1988に加筆）

る岩石が異なる。外帯は、緑色片岩などの結晶片岩などのある三波川変成帯であり、一方、東栄町が立地する内帯は、花こう岩・片麻岩で構成される領家変成帯であり、白色の安山岩もしくは流紋岩などの貫入岩類が認められるという。このように、東栄町域は多様な石器石材が所在するところという、立地的特性が認められる土地柄である。

表1 東栄町内の調査の歴史

年月	遺跡名など	事柄	原因	調査の種類	調査主体	調査担当者など	施設遺構など	出土遺物保管者および場所	備考	文献	時期の内容
1885年ごろ	本郷桜平遺跡	遺跡発見				佐々木友八郎		佐々木友八郎			本郷桜平遺跡の紹介
1925年	本郷桜平遺跡	学会報告			佐々木氏所蔵資料調査	夏目一平・窪田五郎		佐々木友八郎		夏目・窪田1925	
1932年	本郷桜平遺跡	遺跡報告			佐々木氏所蔵資料調査	小栗鐵次郎		佐々木 勝		小栗ほか1932	
1943年～1952年など	引田遺跡	工事中	開田				土器棺墓など	東栄町民芸館		鈴木・岡田ほか1968	町内遺跡の調査と『北設楽郡史』の刊行
1953年	本郷桜平遺跡	工事中	新校舎建設				便所用地から土器棺墓・平地式住居跡の一部	東栄町民芸館		鈴木・岡田ほか1968	
1954年2月	西向遺跡	工事中調査	開田	その他調査		岡田松三郎	竪穴住居跡（焼失住居）	東栄町民芸館	木材の炭素年代測定	鈴木・岡田ほか1968	
1955年	本郷桜平遺跡	遺跡調査	校地整理	発掘調査		庄田晴彦	住居跡・校庭東よりから土器棺墓	東栄町民芸館		鈴木・岡田ほか1968	
1958年9月	ブヤキ窯跡	遺跡調査	台風による土砂崩れ	発掘調査	北設楽郡史編纂委員会	夏目一平・村松信三郎・岡田松三郎・久永春男	窯体	東栄町民芸館		鈴木・岡田ほか1968	
1978年以前	下平遺跡	工事中	開田					東栄町民芸館			行政発掘調査の成果
1985年9～11月	引田遺跡	遺跡調査	農場整備	立合調査	東栄町長	中川真文	配石遺構・土器埋設遺構	東栄町民芸館		赤羽・赤塚編1987	
1986年3月	越見津遺跡	遺跡調査	農場整備	立合調査	東栄町長	中川真文		東栄町民芸館		加藤・石黒編1988	
1987年8・9月	大沢津遺跡	遺跡調査	農業開発	発掘調査	東栄町教育委員会	遠藤才文		東栄町民芸館		加藤・宮腰編1989	
1990年10月～1991年3月	上の平遺跡	遺跡調査	特別養護老人ホーム建設	発掘調査	愛知県埋蔵文化財センター	松田 訓	土坑など	愛知県埋蔵文化財調査センター		松田編1992	
1997年1月	上の平遺跡	遺跡調査	町営住宅建設	立合調査	東栄町長	長谷川 伸		東栄町民芸館		高橋・柳本ほか1998	『東栄町誌』の関連調査とそれ以降
2011年12月14・15日	本郷桜平遺跡	確認調査	本郷校舎周辺整備計画	試掘調査	東栄町教育委員会	金田新也	土坑・炭化物などを含む遺物包埋層	東栄町民芸館		本稿	
2003年	民芸館所蔵資料調査		『東栄町誌』編纂に関わる	資料確認調査	東栄町教育委員会	永井宏幸・川添和幸など		東栄町民芸館		東栄町誌編纂委員会2007	

※その他、糸百合遺跡は戦後岡田松三郎や丸山正雄らによって発見され、条痕環跡が採集されている。

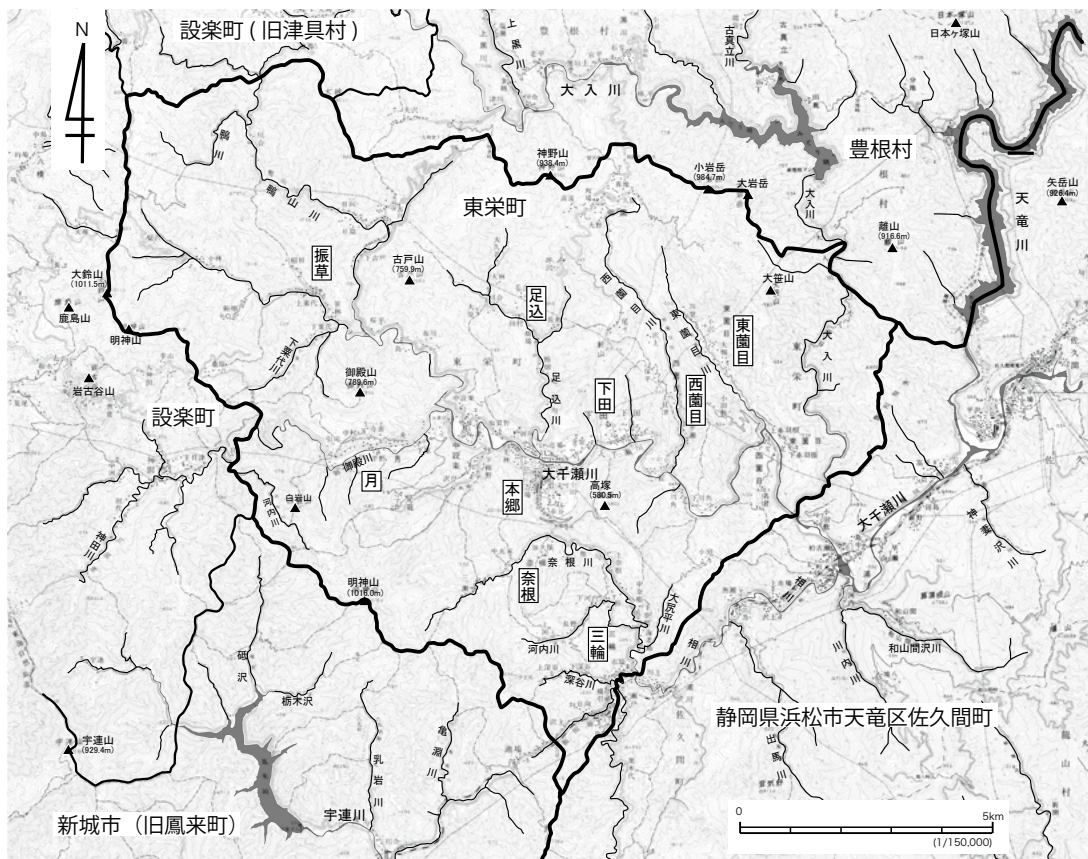


図3 東栄町の地形（国土地理院刊行5万分の1地形図「田口」より）

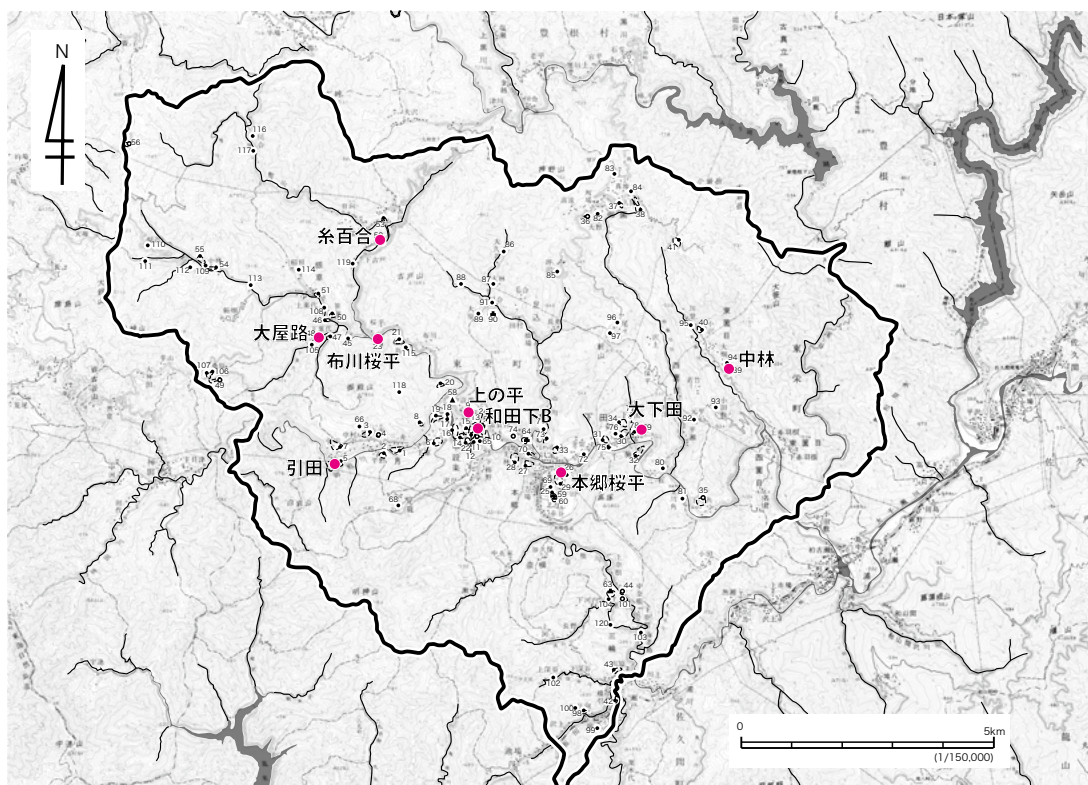


図4 東栄町の遺跡分布【赤色は縄文時代後期～弥生時代前期の主要遺跡】（国土地理院刊行5万分の1地形図「田口」より）

第3期：行政発掘調査の成果 文化財保護法に基づく発掘調査などが行なわれ、多くの成果が知られるようになった。広い面積を調査したものに、上の平遺跡の調査がある（松田編1992）。また、後で詳しく述べる引田遺跡の調査もこの時期に行なわれたものである。

第4期：『東栄町誌』の関連調査とそれ以降

永井宏幸と筆者は、東栄町教育委員会の依頼を受け、2003年から民芸館所蔵資料の調査を行い、『東栄町立民芸館所蔵遺物調査報告書』を提出した（永井・川添2005）。その後刊行された『東栄町誌』では、この報告書の内容を受けて執筆・刊行が行なわれた経緯が記されている（東栄町誌編纂委員会2007）。発掘調査としては、小学校建設に伴い、本郷桜平遺跡の試掘調査が行なわれた。

4. 東栄町域における遺跡の分布

東栄町域では、現在120遺跡が知られており、各時代別の累計遺跡数では、縄文時代53、弥生時代26、古墳時代14、古代31、中世91、近世13遺跡を数える。遺跡数が最も多い中世では、町内中央を流れる大千瀬川流域を中心に遺跡の分布が認められる。縄文時代では、早期前半の押型文土器期から活動痕跡が確認できるが、遺構の展開が認められるのは縄文時代後期以降である。東栄町域では、縄文時代後期から晩期にかけての活動痕跡が確認できる遺跡として、引田遺跡・本郷桜平遺跡のほかに、大屋路遺跡・布川桜平遺跡・和田下B遺跡・大下田遺跡・中林遺跡を挙げることができる。また、弥生前期の条痕文期に当たる糸百合遺跡では、土器棺墓に由来すると考えられる深鉢がまとまって出土している（図4）。

5. 遺跡の検討

ここでは、上述した遺跡の中で、特に引田遺跡と本郷桜平遺跡について、近年の調査成果をもとに紹介していく。

a. 引田遺跡（大字月字引田）

大千瀬川の支流、御殿川の左岸、南向する緩斜面の段丘上に立地し、標高は420mほどで

ある。この遺跡は、戦時中の開田工事中によってすでに遺物の採取などが行われており、大量の遺物が残されている。このとき採取された遺物は、縄文時代晩期後葉から弥生時代前期にかけてのもので、特に条痕文期の土器棺墓がよく知られている。これらの遺物群がこれまで引田遺跡の特徴づけるものと考えられていた。

1985年に、圃場整備事業に伴う立合調査が行われている（図5・表2）。調査は、字引田・字中貝津・字木戸口にわたって行われた。この調査では、引田遺跡ではこれまで知られていなかった、縄文後期を中心とする資料がまとまって出土した。特に、遺物が多量に出土したのは、字引田6番の1である。出土遺物は、縄文時代前期から見られ、後期・晩期が最も濃厚である。遺構としては、縄文時代の土器埋設遺構や配石遺構があった。土器埋設遺構に由来すると考えられる土器は、2個体が別個で出土した。一個体は後期中葉の蜆塚KII式と考えられるもので、深鉢が逆位状態になって出土したものである。別の一個体は後期前葉の堀之内1式併行と考えられるもので、これも逆位の状態で出土した。前者は、記録により6番の1からの出土が確実視できるものである。後者は出土地点の記録がないものの、遺物の出土傾向などから、6番の1から出土した可能性が高いと考えられる。配石遺構もこの縄文時代後期に属するものと考えられよう。また、弥生前期の条痕深鉢を複数個体つかった土器棺墓は、現在では出土地番が不明である。いずれにしても、これら遺構群のより詳細な位置関係は不明である。配石遺構は、大きめの河原石を円形に配し、さらにその中心部にも礫が配されているようである。

遺物の種類は、大きく土器類と石器類に分けられる。土器類は多く見られる深鉢のみならず、壺型土器や注口土器も見られる。土器片を円形に加工した加工円盤も存在する。石器には、石鏃・石錐・石匙・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・有溝石錘・敲石などが見られ、石棒などの石製品も確認できた。

b. 本郷桜平遺跡（大字本郷字上桜平）

大千瀬川の右岸、北向する広い緩斜面の河岸段丘上に立地し、標高は230mほどである。旧愛知県立新城東高等学校本郷校舎の敷地とな

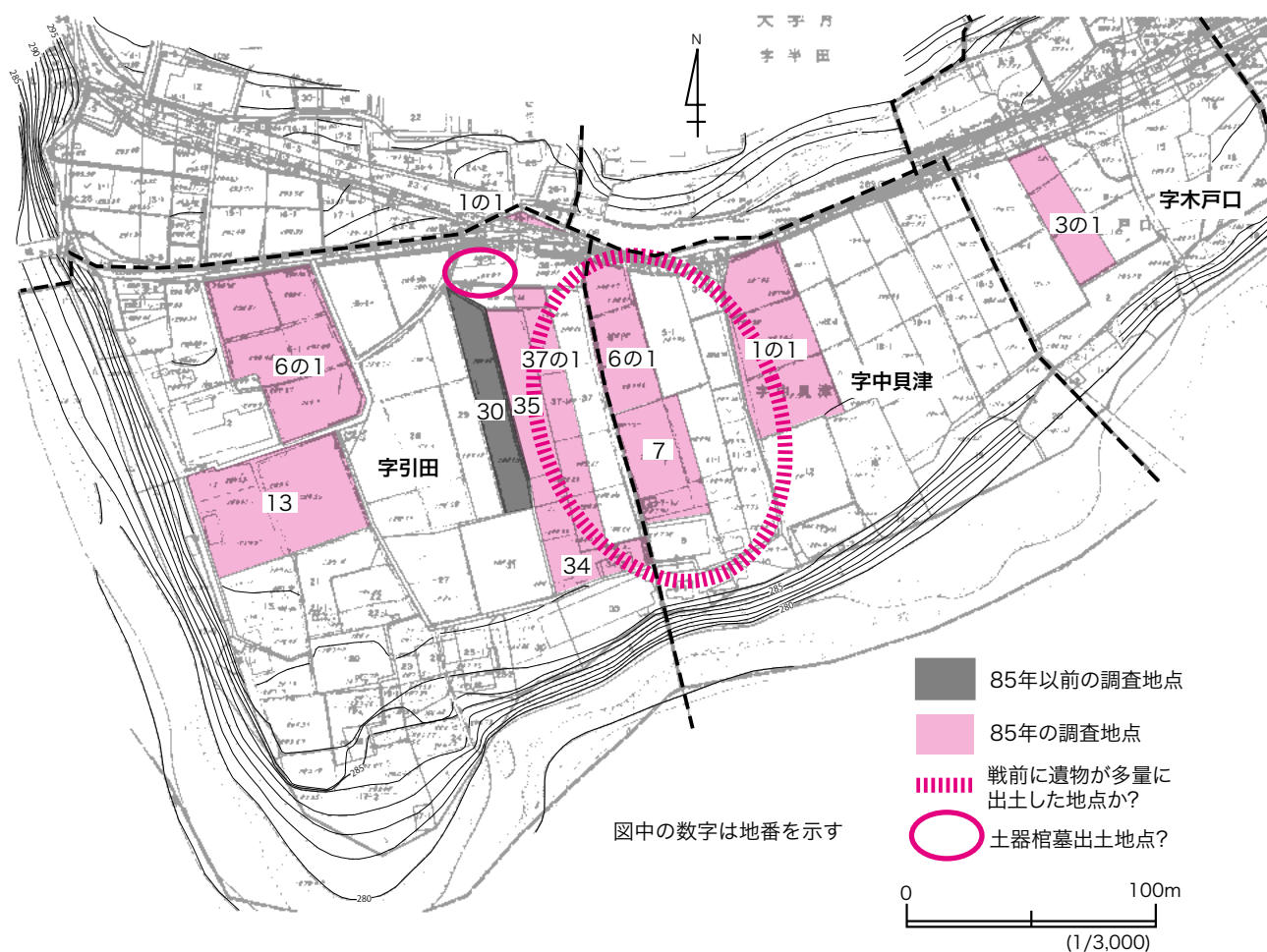


図5 引田遺跡全体図

表2 引田遺跡 85年調査の一覧

字	地番	遺物の時期	遺構など
引田	1の1	縄文晩・弥生前	
	6の1	縄文前・縄文中・ 縄文後 ・ 縄文晩 ・弥生前	土器埋設遺構
	13	縄文晩	配石遺構などもこの地点からの出土か?
	34	縄文晩・弥生前・弥生中	
	35	縄文晩 ・ 弥生前 ・弥生中	
	37の1	縄文後・ 縄文晩 ・ 弥生前 ・弥生中	土器棺墓?
中貝津	1の1	中世	
	6の1	弥生前	
	7	弥生前	
木戸口	3の1	石器のみ	

は、特に遺物量のまとまっている時期を示す。



写真1 85年調査土器出土状況1【東栄町教育委員会提供】



写真4 85年調査土器棺墓検出作業【東栄町教育委員会提供】

っていた当遺跡は、戦前よりの報告・調査によって古くから知られた遺跡である。明治期の研究動向については、上で述べた通りである。

戦後すぐに当地に高校が建設され、大量の遺物が出土したという。その後も校地の整理や校舎の拡張工事などで、土器棺墓8基や平地式住居跡が見られたとのことである。1955年の校地整理時に住居跡が見つかり、庄田靖彦によって調査が行われた。住居跡は1辺約3mの隅丸方形を呈し、主柱穴は4本、中央には河原石によると思われる石囲炉が作られている。住居跡内からは大洞C2式の土器が出土していると



写真2 85年調査土器出土状況2【東栄町教育委員会提供】



写真3 85年調査土器棺墓検出状況【東栄町教育委員会提供】



写真5 引田遺跡の現況（北東より・2004年撮影）

されている。また、土器棺墓がこれまで数基出土しているが、弥生時代以降に属するものと考えられる。

近年、小学校新設に伴う、試掘調査が東栄町教育委員会によって行なわれた。1×2mのトレンチを調査対象地域内で9ヶ所を任意に設定して調査が行われた。その中で、T-5・T-6としたトレンチから炭化物を含む多量の遺物を含む包含層が、良好な状態で存在することが明らかとなった（写真7）。明治時代の地籍図を参照すると、現況ではグラウンドの整地によって北東および東方向に平坦面が伸びているが、この付

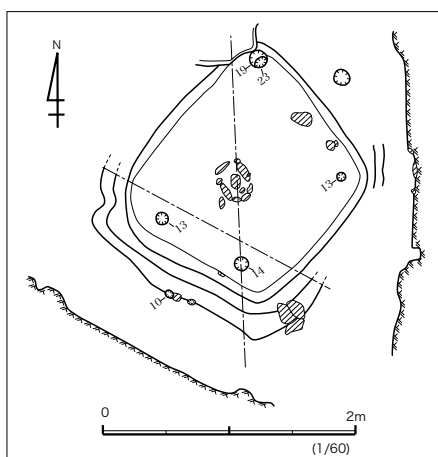


図6 本郷桜平遺跡の竪穴建物跡



写真6 本郷桜平遺跡の竪穴建物跡（南東より）【東栄町教育委員会提供】

近にはかつては水田が展開しており、地形が下がることが窺えられる（図8）。今回の調査成果と、遺跡分布地図や地籍図からの情報を総合すると、遺跡の範囲は北東方向の傾斜地の縁辺部に、約200×100mの三日月状の範囲に遺跡が展開している可能性が考えられるといえる（図7）。

遺物は土器類と石器・石製品に分けられる。土器類は縄文時代晩期中葉以降から晩期末・弥生時代以降にかけて見られ、深鉢のみならず、有文浅鉢も見られる。土製品では土偶が特に注目される。土偶は胴部部分と考えられ、表裏両面に沈線が1条ずつ見られる。この事例が、現在までのところ東栄町内唯一のものとなっている。石器・石製品では石鏃・石錐・打製石斧・磨製石斧・磨石・石類・切目石錘・有溝石錘・石棒・石剣・石冠・環状石斧・環石などが見られる。当遺跡の特徴として、有頭石棒の残存が良好なことや凝灰岩で作られている環石が多く出土していることが挙げられる。また、石冠が1点存在する。石冠は飛騨地域を中心に東日本一帯に見られる遺物であるが、愛知県内では約30遺跡からおおよそ60点、尾張より渥美半島を含めた東三河に多いとされる。石冠は東栄町ではこの1例のみの確認となるが、近隣では豊根村宮嶋遺跡や鳳来町西向遺跡でも報告されている。

6. 今回の調査の意義

ここで、両遺跡で明らかになった事実について、その意義を述べておく。

引田遺跡においては、これまで知られていた条痕文期のみならず、縄文時代後期前葉～中葉の時期を中心とする時期にも遺跡形成がなされていたことが明らかになった。主要遺構としては土器埋設遺構と配石遺構がある。条痕文期が字引田から字中貝津の西側にかけて広く展開するのに対して、後期前葉～中葉の主たる範囲は遺跡のより西側を中心とするものと考えられる。周囲で同様に配石遺構が確認されている遺跡には、静岡県浜松市天竜区佐久間町の半場遺跡が古くから知られている。形成時期も縄文時代後期前半と、引田遺跡の事例と併行する。両者の距離は直線で13.4kmほどあり、それぞれの遺跡が縄文時代後期の複合的な活動を行なった場所とすれば、別集団の活動場所であったと想定することが可能といえる。その他、東栄町内での後期前葉～中葉を主体とする遺跡では、大屋路遺跡で注口土器が大型破片の状態で出土していることが知られている。

一方、本郷桜田平遺跡は、晩期中葉以降から遺跡形成が活発化し、弥生時代前期の条痕文期まで継続する。これまでの調査で、土器棺墓と竪穴建物跡が見つかっており、豊川市の麻生田大橋遺跡と同様の活動時期であったといえる。上述した引田遺跡でも、以前から条痕文期の土器棺墓がまとまって見ついている。引田遺跡

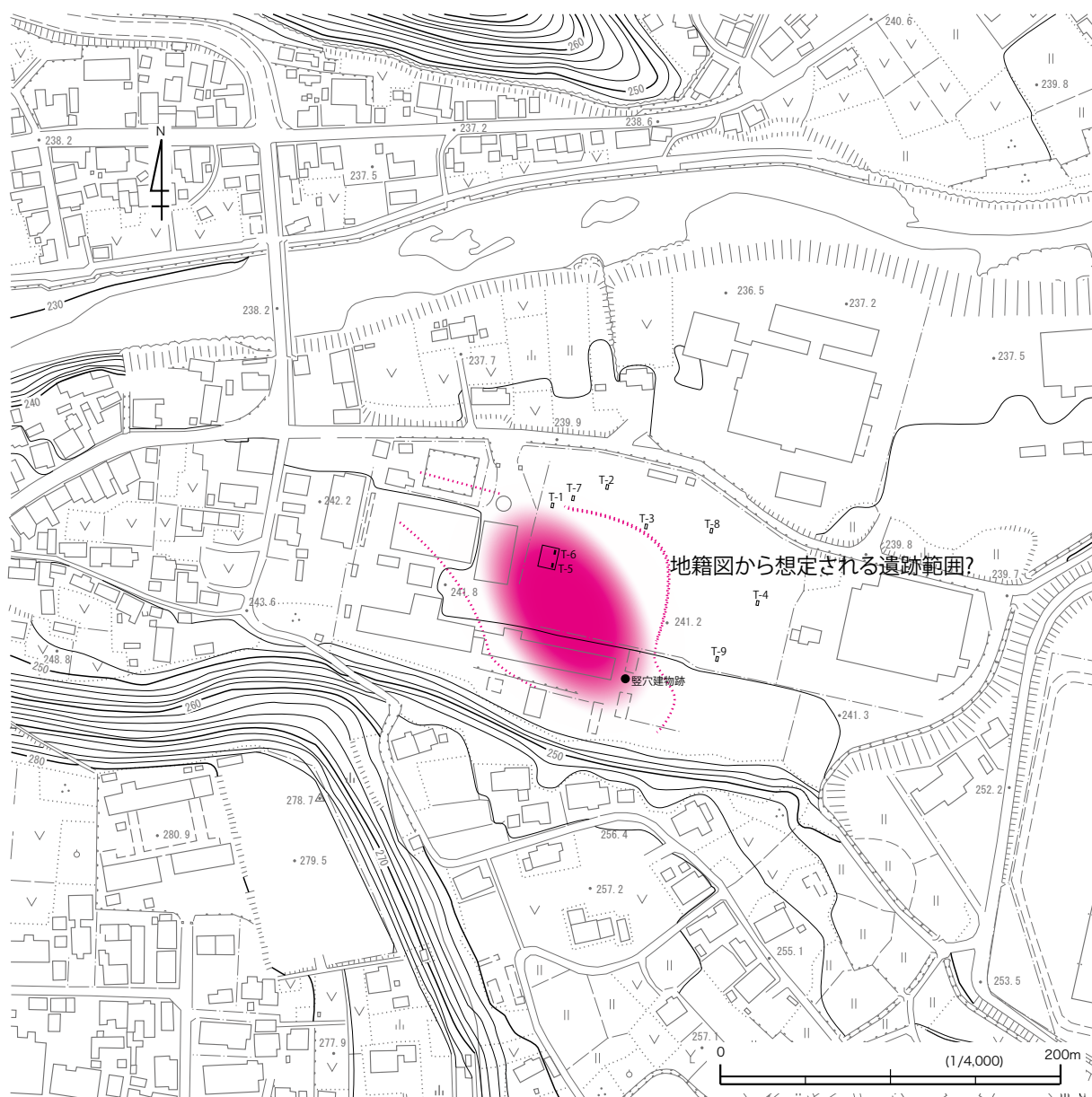


図7 本郷桜平遺跡全体図1

と本郷桜平遺跡の距離は、直線で4kmほどである。埋葬遺構と遺物を多量に含む包含層の形成など、複合的な活動を行なった遺跡が、後期の段階よりも密に出現している傾向があり、条痕文期の糸百合遺跡もそのような状況の中で遺跡形成が行なわれたものと考えられる。

東栄町周辺も視野に入れて遺跡分布をみると(図9)、縄文時代後期から晩期前半と晩期後半以降とは、前者の遺跡が多く見つかる作手地区と後者の遺跡の多い新城市鳳来地区北西域という差はあるものの、他の地区では、両者の遺跡が散在している様子が窺えられる。ところ



写真7 本郷桜平遺跡 T-6 包含層検出状況(西より)

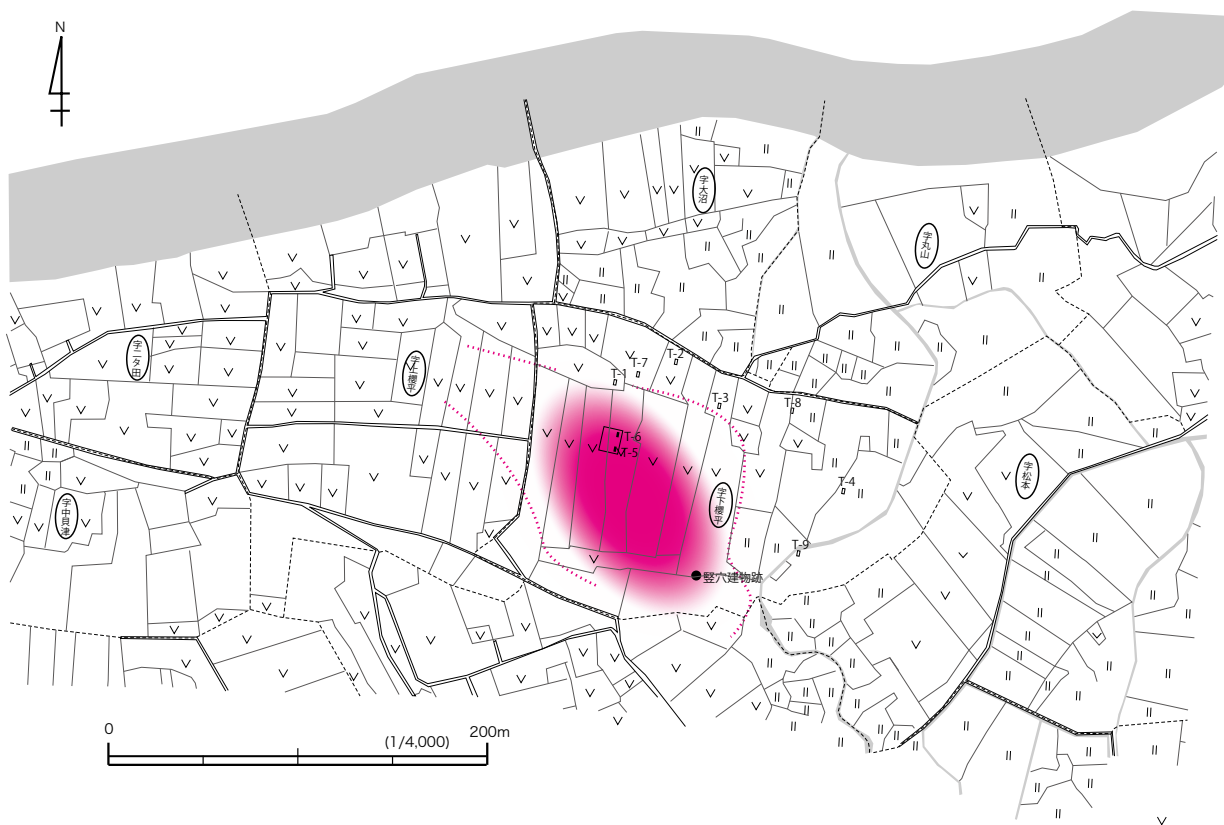


図7 本郷桜平遺跡全体図2

が、縄文時代後期の様相に比べて、晩期後半以降（一部条痕文期を含む）の様相では遺跡間距離が狭くなる傾向がある。痕跡の残る形での活動内容の顕在化ということになるであろうが、その社会的要因を、今後検討する必要がある。

7. 今後の課題

本稿では、近年の調査成果をもとに、引田遺跡と本郷桜平遺跡について紹介し、両遺跡は当地域の縄文時代後期から弥生時代にかけての変遷を考える上で重要であることを示した。東栄町・設楽町の町境付近は、矢作川水系・豊川水系・天竜川水系の河川の水源地が迫っている地域であり、現況でも設楽盆地では、縄文時代後期の遺跡が集中する地域として知られている。今回は、引田遺跡と本郷桜平遺跡の分析結果（図9）の提示に留まったが、その他各遺跡についてもできる限り詳細な様相を検討し、各遺跡の特性を加味した上で、再度遺跡分布の問題を検討すべきと、筆者は考えている。今回は、今後の検討を行なうための覚書として提示するもの

である。

一方で、図9の範囲内で、宇連川流域に当該時期の遺跡が知られていない点は、注目される。図2と比較すると、この場所は設楽層群の東側に当たり、ここは、ガラス質の熔結凝灰岩が分布している地域からはずれる範囲である。一方、設楽層群の北から西側にかけては、少ないながらも後晩期の遺跡の展開が確認できる。図9内の宇連川流域で、今後も新規の遺跡が確認されないのであれば、この石材の分布域と遺跡所在の有機性を考える、好例になるかもしれない。

このことは、拙速には結論を出せないことであるので、今後の課題として提示しておく。

謝辞

本稿は、永井宏幸氏と筆者による東栄町立民芸館での所蔵資料調査作業が基となっている。また、記録に際しては、石黒立人・宮腰健司・堀木真美子・長田友也・増子康眞の各氏のご協力を賜った。この調査の機会と本稿の作成にご協力賜った、東栄町教育委員会の金田新也氏に

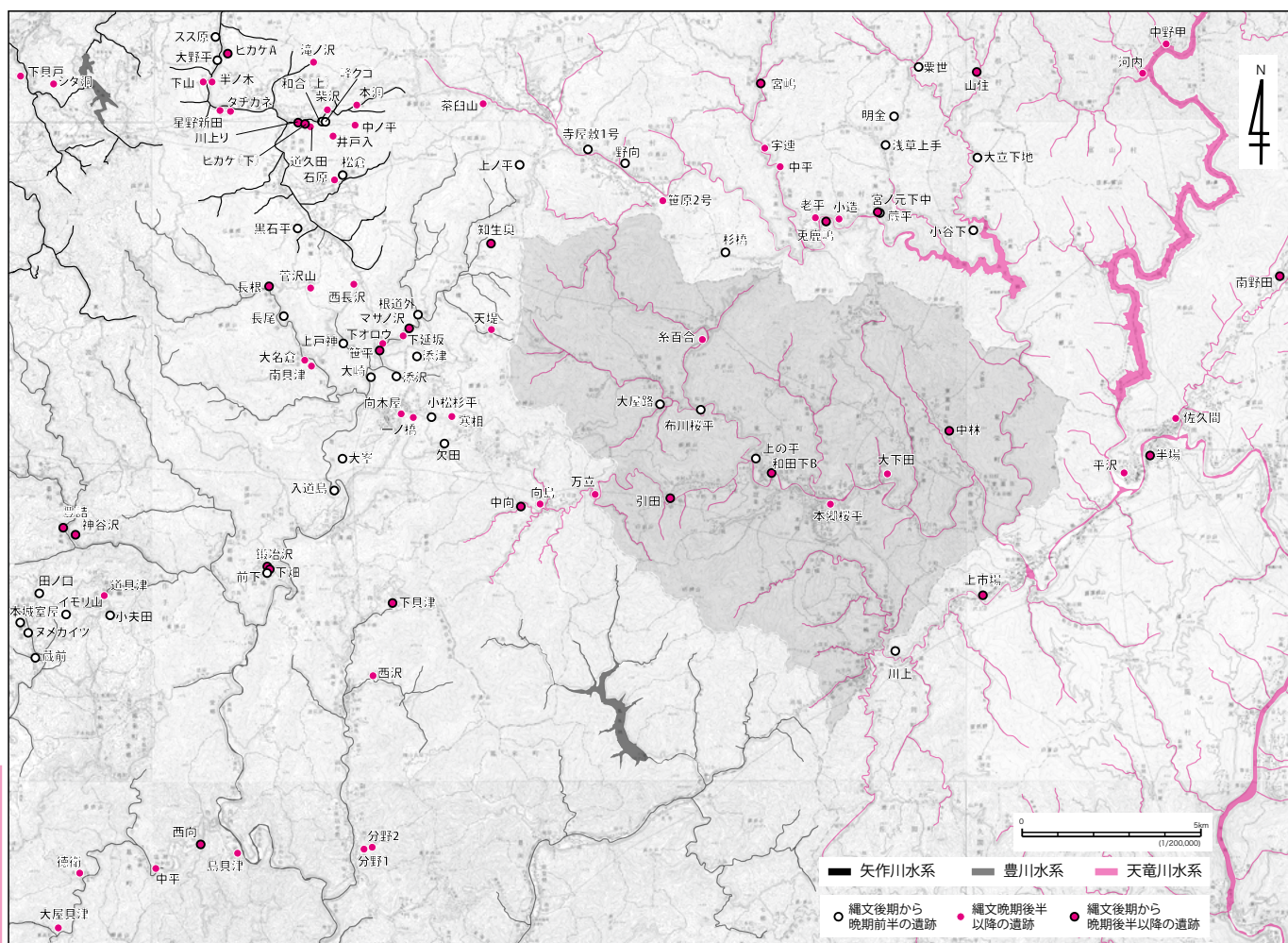


図9 東栄町周辺の縄文時代後晩期（一部条痕文期を含む）主要遺跡分布図
 （国土地理院刊行5万分の1地形図「明智」「足助」「御油」「根羽」「田口」「三河大野」「天竜」「佐久間」「満島」より）

は、感謝の念を絶えない。本郷桜平遺跡の調査は、愛知県教育委員会文化財保護室の伊藤太佳彦氏の支援で行なわれたことを付記しておく。

なお、本稿は、2012年9月22日・23日に

南山大学で行なわれた、三河山間部研究会の発表内容である。発表の機会を与えていただいた、黒沢 浩氏にはお礼申し上げる次第である。

参考文献

- 夏目一平・窪田五郎, 1925 「三河国北設楽郡本郷町字桜平石器時代遺跡に就いて」『考古学雑誌』15-8.22～26頁。考古学会。
 小栗鐵次郎, 1932 「北設楽郡に於ける先史時代及原始時代の遺蹟」『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告』10。愛知県。
 紅村弘, 1963 『東海の先史遺跡 総括編』名古屋鉄道。
 鈴木富美夫・岡田松三郎ほか, 1968 『北設楽郡史』原始-中世。北設楽郡史編集委員会。
 小畑頼孝ほか, 1985 『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』資料編I。愛知考古学談話会。
 沢井誠・設楽団研グループ, 1988 「南設楽層群」『日本の地質 中部地方II』123～125頁。東京 共立出版
 松田訓編, 1992 『上の平遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第41集。
 加藤安信・宮腰健司, 2003 『愛知県史資料編2 考古2 弥生』愛知県。
 永井宏幸・川添和暁, 2005 『東栄町立民芸館所蔵遺物調査報告書』愛知県埋蔵文化財センター。（東栄町提出報告書）
 東栄町誌編集委員会, 2007 『東栄町誌 自然・民俗・通史編』東栄町。
 川添和暁, 2007 「東海地方の諸遺跡」『季刊考古学』101.76～81頁。東京 雄山閣